

第5回 帯広市都市計画マスタープラン検討専門部会 会議録 要旨

日時：平成31年1月23日（水） 15：15～16：40

場所：帯広市役所 8階 教育委員会室

■会議次第

- 1 開会
- 2 都市建設部長あいさつ
- 3 専門部会長あいさつ
- 4 議事
 - (1) 次期将来都市構造について
 - (2) その他
- 5 閉会

■出席者

委員：5名 事務局：9名 傍聴者：2名 報道：3名

■委員の意見等

○次期将来都市構造について

- ・土地利用について、用途地域の設定など、全体の骨格となる基本的な部分は問題ない。その上で、あと少し工夫を凝らすという視点が必要。
- ・帯広はこれまで環境に配慮しながら住みやすい街をつくってきた。身体でいうツボのようなものを探り、そこを押さえながら街を維持していくべき。
- ・人口減少によって税収は減る。一方で高齢化が進み、出ていくお金は増加するので、行政は道路や河川敷の活用、不動産価値を上げるなど、収入が増えるメカニズムを考えるべき。
- ・商業施設の日中のお客さんの入りが少なく感じる。中心市街地に他の娯楽施設があるなどすれば、人の動きが生まれるのではないかな。
- ・帯広畜産大学の立地は学びや生活の場としては適切であるが、学生が街に出る機会の増加が望まれる。
- ・学生の中にも起業したいという人は増えてきている。そのためのチャンスがある場がもっと必要である。
- ・とてっぽ通・西2条通などが、若者が商売としてお店を出す魅力的な場所となるべき。そのような新しく商売を始めるようなストリートを計画的に整備することはできないかな。
- ・ボランティアによる取り組みで、人の集まる空間も出来てきている。それらを巻き込んだ活気づくりもできるのではないかな。
- ・中心市街地において、ナイトタイムエコノミーは活発である。しかし昼の活動が少ない。どのようなことを行っているか、積極的にみせていくことも大切ではないかな。

- ・工業系用地に商業施設があることについて、工業系に限定されたエリアよりは商業施設もある方が、人は集まりやすいのではないかと。にぎわい創出の手段として有効な面もあるように思う。
 - ・駅南付近の土地について、もう少しポテンシャルを生かし、有効活用していくべき土地があるのではないかと。
 - ・駅南側のとまちプラザなどの施設を、もう少し企業や住民の方に利用してもらえようになればよい。
 - ・市民協働という考え方は市民側の比重が大きい印象を受ける。行政と民間のコラボレーションをいかに進めていくかが大切なのではないかと。
 - ・街について考えていく上で子育て等、女性の視点は重要となってくるだろう。
 - ・海外の事例でコインランドリーの防犯対策のためにカフェを併設し、折り畳みのサービスを導入したところ、人々が集まるコミュニティ空間へと、雰囲気がガラッと変わったという事例がある。
 - ・お菓子などを買いに行った際にその場で食べるか、家で食べるか。人と人がコミュニケーションできる場が店舗や周辺にあればいいのではないかと。
 - ・「高齢者の施設」では利用者が限定されるのではないかと。誰にでも利用できるのであれば、色んな人が立ち寄りやすいような工夫をするべきである。
 - ・多様性が感じられる場所が一番魅力的なのではないかと。子供からお年寄りまで様々な年代が集う場所が必要である。
-
- ・公共交通について、誰が、どこで、どのような使い方をするのか考えていかなければならない。
 - ・人口減少にあわせて公共交通の利用者も減少している中、充実した路線網の整備は難しい側面もあるのではないかと。
 - ・公共交通の効率を高め、より多くの方に利用してもらうためには、図書館や病院などの目的地となる施設が、一定のエリアに集積しているのが望ましいのではないかと。
 - ・バスだけではなくすべての公共交通機関が連携をとっていく必要がある。
 - ・先進的な事例から積極的に学び、MaaS時代の到来を見越してIT・スマートフォンを活用した、利用しやすい公共交通を考えていくべきである。
-
- ・帯広市は緑の骨格はできている。今後はより生活に密着した緑、例えば歩いていて楽しい、心豊かになるような場所を大切にしていけるべきである。
 - ・帯広は街路や公園・緑地など骨格としての緑はあるが、一般家庭には少なく感じる。玄関先を緑化するなど、少しでも配慮がほしい。
 - ・ペットの散歩の際に歩く道は生活と密着している緑がある場所なのではないかと。そのような場所はグリーンパークなどすでにあると思うので、さらに活かしていくべきである。

- ・ 緑がある場所は施設やハコモノがなくとも、自然に市民が交流する場となりうる。
 - ・ 樹木が大きくなりすぎるケースがある。ボランティア等、市民と協力して維持管理していくことも必要となってくるのではないかな。
 - ・ 他都市の例で、大学の園芸関係者が近隣の住民に技術的指導を行い、周辺の緑を守っている事例がある。
 - ・ 市が管理している緑に対して、市民がどこまで手を出していいのかわからない人もいるのかもしれない。
 - ・ オープンガーデンの取り組みは十勝・帯広でも行っているが、冬場の取り組みはなかなか難しいのではないかな。
 - ・ 冬に緑・花を愛でるという志向は十勝・帯広には少ないのかもしれない。
 - ・ 公園は江戸時代から存在しているが、日本的な美しさを体現する場だった。現代においても緑は心・文化を育て伝えるものである。
 - ・ 現在の緑のインフラを最大限活用するための知恵が必要である。
 - ・ 緑の活用をどのように行っていくかは行政だけでなく造園業など、民間のアイディアも必要となってくるだろう。
 - ・ 緑のネットワークの形成は単なる緑地ではなく、環境に配慮した装置として考えていくべきである。
-
- ・ 次期の都市計画マスタープランに SDGs 的な考え方を盛り込むことによって、環境に配慮してきた帯広の都市計画の特色になるかもしれない。
 - ・ 災害はいつ来るかわからない。起こる前に、発災した緊急時の対応を行う場所、避難場所（エリア）を決めておくなど、事前復興という考え方が今後必要になってくるかもしれない。
-
- ・ 都市計画のツボを考え、行政が部局横断的に取り組むことが必要。そのためには総合計画の役割も大切になってくる。
 - ・ 都市計画マスタープランの検討にあたっても、都市計画だけではなく、世代間をどのように繋げていくか、もっともっと生活の場についても考えていかなければならない。
 - ・ 今までの都市計画は、どう都市をつくり維持していくかということに主眼が置かれていた。これからは新築だけでなく、リノベーションやコンバージョンがより大事になってくるのではないかな。
-
- ・ 街には住んでいる人の想い入れがある。そうした人々の想いがどれだけ蓄積されているか、ということが街や地域のポテンシャルに繋がる。例えば古い街区などでは人々の想いが蓄積され、可能性を秘めたシンボリックな場所として、持続的にコミュニティが維持され得るのではないかな。

- ・例えば商店街などで、一定の店舗が協力して道路に飲食・休憩スペースを設け、人々の溜まり場のようなものを作るような取り組みが考えられる。具体的には、ベンチやイスは行政が支援し、維持・管理は店舗が担う。このような市民と行政のコラボレーションには双方、互いにメリットがある。こうした取り組みは、最初は点の取り組みとして行っていくしかないが、そこから周囲に波及していくことも期待できる。
 - ・都市計画マスタープランにどう計画を実現していくのかを書き込めるように工夫するべきではないか。
 - ・都市計画は土台となるべきもの。どう実現するかは公民連携で行っていく必要がある。
 - ・民間に任せてしまうのではなく、内部の各部局で考え知恵を集めるべきだ。
 - ・女性視点で考えれば、スーパー以外にもお惣菜が買える場所や、子供を安心して預けることのできる施設などが必要であると思う。
 - ・ダンス教室など目的がはっきりとしていれば男女関係なく人は集まるのではないか。
 - ・オーガニック食品の販売店など需要のある施設、お店が増えてくるべきではないか。
 - ・地場産品を大切にし、活かしていくべきである。
 - ・海外では野菜や肉、チーズなどを地元の生産者と直接契約して仕入れるスーパーなどがある。その場で調理してもらえるなど、非常にフレンドリーで、コミュニティの場となっている。フードバレーを進める十勝・帯広のシンボリックな施設となり得るのではないか。
 - ・ボーダレスな社会状況を踏まえ、先鋭的な人々をまちづくりに巻き込んでいくべきである。
-
- ・帯広の都市計画は他に誇ることのできるもの。先人がつくり上げてきた都市計画を継承し、その上で、現代でも誇れる「光るモノ」を次期の都市計画マスタープランに盛り込むことが大切。
 - ・事務局案のとおり次期将来都市構造については、「土地利用」、「都市施設等」、「都市環境」の3つの方針を仮設定することとし、次回以降の会議で具体的な内容を協議することとしたい。

■その他

- ・次回は、5月頃に次年度の第1回の専門部会を開催することで決定した。

以上